

右の圖に依て明かなる如く、諸本の數字を現行本に比して博本の一九二不足より、宮本の一二〇超過の相違があるのである。而して宋元兩本が九八超過せるは、釋號の有無に由來するものである。而して現行品は前に示した如く總字數七〇〇六であるから、これから經次注の七を除いた六九九九が、表題までの現行の總字數である。故に之に右表の數字を増減すれば、各本の數字の概數は明になるのである。併し乍ら右の圖示したのは重なる点のみであるから、各本の實數を出すことは余程煩雜の事に屬するのである。且つ是等の數字より所謂天台説の六萬九千三八四を算出することは恐らく徒勞に歸するものではなからうか。

—一〇、一〇、二七一—

□ 歌集から

松田壽孝

- 吾が住みは山峽なれば高き山の峰より朝は明け来るなり
- 高き山に霧こもらひて麓野は靜かに雨の降り瀧ぐなり
- 山峽の狭く限れる空の上を渡らふ雲のしきりに早し
- 陽だまりのよき部屋ぬちにまり投げて遊ぶ子見つゝ祖母はたのしむ
- わが瞳ひたに見つめてわが言葉とかなとずなりこの幼子は
- 南天の枝に來し鳥を見ほけりていかに呼べども子は振りむかぬ
- 解禁の今日をけながく待ちにけむ鮎つり人ら混み合ひ乗れる(車中)
- 針の行方やうやく見えずなりにけり釣竿たゝみかへらむと思ふ
- 狭き家にたゞ秩序なく運ばれし荷物は積みてしばし置きたり(轉居)
- ひえびえと身のしんにしむ無花果を食べつつ故郷の秋を思へり